編　集　後　記

筆者に編集後記の依頼が来た時，正直かなり戸惑いました．私は雪氷学会に入会してまだ3年と少し，おまけに編集委員に名前を連ねてはいるものの，ここまで大きな仕事もなかったため，「恐れ多くも本当に書いてもよいのだろうか？」と感じました．しかしせっかくのご依頼を断るのも気が引けたため，結局引き受けさせていただくことにしました．

私は学生時代，雪氷の研究とはほとんど縁がなく，降水や大気の化学の研究をしていました．一度だけ南極・ドームふじ越冬の講演を拝聴する機会があり，「凄いところでする研究もあるのだなあ」と驚き半分興味半分だったことを記憶しています．数年経って就職後，私はアジアの山岳アイスコア研究に加わらせていただくことになりました．コア研究の右も左も分からないまま極地研究所に出張となり，これまたよく事情が分からないまま「コア処理」のため低温室で作業を行うことになりました．ちなみに，低温室の気温－20℃はこの時が初めての体験でした．作業は試料である氷を手で持ってセラミックナイフで周囲を切削するのですが，高々20分ほどで，手が冷えて痛くなってきました．が，周りの人達を見回すと，黙々と作業を進めています．「何でこんなに平気なのだろう？」と驚き半分，痛みをこらえながら作業を進めたことを思い出します．それから数年経ち，今では低温室での諸作業は日常となり，低温室作業の初心者の方に「寒くなったら自分で外に出て下さい」と指導する立場になっているのだから分からないものです．雪氷学会には，このような異分野からの研究者でも快く受け入れてもらえる懐の広さを感じています．雪氷と縁のなかった私がここまで研究が続けてこられたのも，周囲の雪氷関係の方々に支えられてきたと出会いの幸運さに感謝している次第です．願わくばこの雰囲気を伝えていってほしいものです．

さて今年の雪氷研究大会は東京です．9月下旬とまだまだ残暑が厳しい時期での開催ですが，ベテランの方も入会して間がない方も学生の方も一人でも多くの方々に参加いただき，実り多い活発な大会になることを祈念いたします．

（三宅隆之）